

## カンツォネッタ (Canzonetta) VI

倉橋重史

### 1. やまあらし

やまあらしには、山から吹いてくる風という意味をはじめ、柔道の技の一つや、漱石の『ぼっちゃん』に登場する数学の教師のあだ名、さらに動物の名前などがある。ここでは動物のやまあらしについて述べたい。山荒らし、豪猪と書くらしい。動物学の知識はないからその動物の生態や特徴に関しては詳しく述べることはできない。知っているのはこの山荒らしは顔以外に刺のような剛毛をもっている動物であるということぐらいである。哺乳類ヤマアラシ科で、全長が50センチ内外あり、夜行性で、木登りが上手らしい。敵に会うとその刺のような剛毛を逆立てて身を守るようである。

植物には鋭い刺を持つものがある。サボテンやゆずがそうである。一見刺を持たないように見える可憐で、美しい花にも刺のきついのがある。バラがそうである。詩人ゲーテは「野ばら」の2節で「子供は言った、僕は折るよ、野のばらよ。ばらはこたえた、刺しますよ」(Knabe sprach: ich breche dich, Röslein auf den Heiden, Röslein sprach: ich steche dich.) とうたった。この歌からバラに託した愛の痛さが伝わってくる。バラを植えてバラの咲くのをまっている者にとって、この刺は理解しがたい。だがバラは刺を持っている。バラを切って花器に活けようとすると指を刺される。したがってバラを切ったり、手に持つ時には革の手袋を用いる。どこかで片方を落とした手袋がここで案外役にたつのである。

ところで、やまあらしが刺をもっているのは外敵の攻撃から自分を守るためであるが、それは自分から攻撃するためにも用いることができる。刺は武器の役割を果たす。武器は守勢と攻勢の両方に用いられる。自分を守るためという

側面を重視すれば武器の使用は正当化される。守勢のために用いるのであるからそれは認められる。しかし他者に危害を加え、殺戮するために武器を用いればその正当化は難しい。紛争や戦争に相互が自分の正当化を主張するのはその証拠である。なぜ武器を用いたのか、その目的や意図が問われる。そしてどちらが最初に武器を用いたのか否か、どのような武器なのか、それは相手にどの程度の被害を加えたのかなどが問題になる。戦後の処理や、紛争後の話し合いなどで以上の点が問題になる。しかし当事者同士の話し合いでは、なかなか決着がつかない。往々にして勝てば官軍式の勝者の主張が優位を占める場合が多い。第二次世界大戦後の軍事裁判がその例である。その弊に陥ることがなく、公正な裁定ができるため中立的な仲介者がその問題の解決に介入する場合がある。しかし当事者間の主張と意見が鋭く対立し、考え方が根本的に相違する時は、その調停は困難である。

武器は守勢と攻勢にだけ用いられるのではない。実力を行使する前の威嚇のために用いられる。威嚇とは自分の力を相手に見せつけ、相手に脅威や恐怖感を植えつける行為である。威嚇は一方的に相手を脅して脅迫するために用いる場合と、相手からの脅しに対抗するために用いる場合がある。いずれも攻勢と守勢の前段階である。

ところで山荒らしは生れつき豪毛を持っているので、それは先守先制のために用いるのではないであろう。もちろんそのような一旦緩急の場合は剛毛はその威力を十分に発揮するであろうが、普段は武器としては使用しないであろう。しかしこのような毛をもっていれば、不便なこともあるだろう。仲間同士密接に接近することができないからである。

ショウペンハウアーはこの剛毛について面白いことを書いている。それは次のような話である。ある寒い夜、山荒らしが暖をとるために集まってきた。しかしお互いの豪毛のために、近付くと相互の皮膚をさして痛い。そこで離れる。すると寒い。また近づく。そして離れる。このようなことをして、やっと彼らは適当な間隔 (mäßige Entfernung) を見つけた。中庸の間隔である。彼はそれを「一緒になって生きていける中庸の距離 (die mittlere Entfernung) 間隔が礼儀と、上品な風習というものである」と述べている (*Parerga und Paralipomena. Zweiter Band*, Schopenhauer Sämtliche Werke 5, S.689)。

社交にはこのような中庸の距離が必要である。それによって人間関係は秩序を保つことができる。カントはそのことを人間の非社交的社交性 (die ungesellige Geselligkeit) と表現している。彼は人間は社交的な存在であるが、常に社会から孤立しようとする存在であると考えたのである。カントは『世界公民的な見方からする一般史の構想』の第4命題として「自然が、人間に与える一切の自然的素質を発展させようとして用いる手段は、社会においてこれらの素質の間に生まれる敵対関係 (Antagonism) であり、この関係は社会の合法的な秩序を生む原因になる」と述べている (*Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht.*, Kant Werke, Akademie Textausgabe VIII. Walter de Gruyter & Co. S.20)。

敵対関係とは自然的素質としての非社交的社交性のことを指している。人間は社会を形成し、組織化しようとする傾向を持つが、また仲間から離れ、一人になろうとする傾向も持っている。ここでカントは社交性よりも非社交性の意味を重視している。彼は後者の傾向こそ人類を未開的な状態から脱出し、文化に向かうことを可能ならしめ、感性的な強制によって結成されていた社会を道徳的な全体に変えるような思想を形成し、無力と無為に甘んじる状態から勤労と辛苦の生活に入り、再びこの辛い状態から脱出することができるようにさせるのであると考えたのである。彼は非社交性を重視している。カントは文化や芸術はこの非社交性から生じた果実であると考えているのである。

ショウペンハウアーは山荒らしの刺のような剛毛の比喻をもって社会関係における中庸の距離の重要性を指摘したが、カントは敵対関係のなかで、一見して無秩序を生む原因であるかに見える非社交性が実は社会的秩序の形成にとって重要な意味を持っていることを指摘したのである。そして彼はそのために法を掌握する公民的社会の形成を考えたのである。ただ人間の場合、前者では剛毛があるのか否か、その威力はどの程度なのか、剛毛を逆立てる条件は何かなどをどうして知ることができるかが問題であり、後者では非社交性だけに価値が置かれ、それが重視されすぎると社会自体が成立しないという問題がある。

## 2. 正義と法について

最近官僚や裁判官、警察の腐敗が蟬蹻（ひんしゅく）をかっている。高級官僚が公金を着服したり、私用に使う事件が多く報道されている。厚生省の事務次官が老人ホームの建設費や高齢化対策の予算を着服した事件があった。その事件についてはかつて書いたことがある。最近では外務省の機密費の着服、デンバー総領事の公金の私的利用、サミットの際のタクシー券の流用などなど多くの事件がそれである。そしてその傾向は警察官、法曹界にまで及んでいる。県警察の本部長が事件への適切な対応をせず、マージャンしていて罷免されたり、警察官が事故を隠蔽し、汚職をしたり、高裁の判事が妻の脅迫事件に絡む捜査情報を漏洩したり、同じく高裁の判事が児童売春禁止法違反に問われて訴追された事件など常識では考えられないことが多発している。大学でも試験の漏洩問題などがある。それらは氷山の一角でなければよいが、その根底にはモラル、倫理感、正義感、責任感のマヒや欠如がある。犯罪として厳正に裁かれなければならないが、そのような行為が組織ぐるみで行なわれ、それが常習化し、日常化していくことは危険である。

ここではとくに犯罪を裁く側の正義感の欠如について考えたい。具体的には、個人としての官吏のモラルの無さ、あるいは低下、官庁や裁判所の官吏、公僕としての意識や精神、その構造、国民の血税という意識の希薄さなどが問われなければならないが、その基底にあるものは、彼らの正義感はどこに行ったのかという問題である。それを社会学の立場から管見したい。

正義に関する社会的考察はそう多くはない。しかし法社会学という名の研究は法に関しては説明していると考えるが、正義についてはどのように接近しているのだろうか。法と正義との関係についての研究はどうか。この辺りの研究については縁遠いので情報を持ち合わせていない。しかし私は法学に興味をもっていた。ある時社会学の専攻を止めて法学部に転部しようかと考えたことがあった。しかし法学がいわゆる法解釈の域を出ないのではないかという考えもあり、また私は法哲学や法史学の領域に関心があったので、法学に進むことを断念した。しかし今も書架には法史学や法哲学の書物が多くあり、川

島武宣編集の『法社会学講座』10巻も並んでいる。このような経緯から法と正義などについては以前から関心があった。

フィレンツェのアルノ川にかかるトリニタ（三位一体）橋を少し南に行くと、トリニタ広場にでる。そこに高い塔があり、その上に秤を持っている正義の女神が立っている。ローマ神話の正義の女神はユスティティアである。彼女は目隠しをし、秤と剣をもっている。目隠しは愛憎などの私情から中立的であること、つまり正義を判断し、守るためには感情中立性に立たねばならないことを物語っている。秤は公平を、剣は判決に基づく実力による行使を意味している。絵画でも彫刻でも秤や剣は正義の象徴とされる。

ところでラテン語の *jus* やドイツ語の *Recht*, フランス語の *droit* などは、正義を意味すると同時に法を意味する。またこれらの言葉は右をも意味する。左より右に価値を置く右の優越性が見られる。プラトンは魂は理性的部分の知恵、気力的部分の勇氣、欲情的部分の自制において完全となるが、それらの上に正義が加わって3つの部分を正しくさせると説いている。またアリストテレスは法の目的が正義の実現にあると考え、自然の正義と制定による正義に分けた。この区別が法では自然法と実定法の区別となった。

だが現在の実定法に関する限り、法と正義は異なる。例えば堕胎は正義に反すると思う人も、それが優生保護法14条1項4号で合法化されていることは認めざるをえない。このことは実定法は正義という観念とは別の体系であることを物語る。しかし法には正義が求められ、正義は法によって守られると考えられる。ソクラテスが「悪法といえども無法にまさる」と考えたのはその例であろう。

法は社会的規範としては正義と共通点を持つが、正義や道徳とは異なる。プラトンは正義を徳の一種と考え、アリストテレスはその徳を心の習性の一種とみた。そして正義を罪と罰、あるいは契約における給付と反対給付の均衡を意味する交換的正義と、各人の価値にしたがって配分する配分的正義に分けた。わが国では伝統社会において法意識の特徴として「権利の意識」の欠如が指摘されてきた。明治以降は条約改正と呼応して行なわれ、現実の社会生活は法典の原理をことにする社会規範に基づいて行なわれた。法は社会生活とは縁遠い存在であった。そのような法に対する意識と正義は観念的、抽象的には結びつ

くが、現実には世間の正義と法の正義が直結するものとしてでなく、むしろ背離しながら法の正義が上からの規範や命令として作用し、実生活の正義はこれまでの社会通念のなかで生きてきたと言える。その通念には大きく分ければ二つの型があると考えられる。掟と習いである。いわゆる掟という名の公の定め、法度（はっと）、日常生活のしきたりが生活を規制した。習いはしきたりであり習俗である。仲間内の庶民的な正義は血縁、地縁社会の常識的な正邪、善悪、真偽の判断基準で計られ、あるいは義理人情の世界に通用するものとして採用された。このような日常世界での正義が上からの法、掟によって支配されるようになるのは政治権力の強化、支配力の増大によってであり、それによって庶民の権利が制限され、圧迫される時である。また国益に反する反正義的行為や現象が露呈したときであり、それは警察や軍隊の力によって強制され、弾圧されるのである。これに対して、習いはまさに世のきまりになれること、まねることによって世間が正しいと見做す慣習である。それを外れると村八分のようなマイナスのサンクションを受けることになる。サムナーはそのような制裁の有無、強弱によってフークウェイズ (folkways) とモレス (mores) に区分したとも言えるが (W. Summner, *Folkways* Dover Pub., Inc. 1940 p.2, p.30), 掟やサンクションを伴う習いはモレスであり、一般的な習いはサンクションを伴わないものと言えよう。つまり掟は公のモレス、習いは世間的なモレスとフークウェイズであると解釈することもできる。

ところでマックス・ヴェーバーは法を「正当性の信念」に支えられた秩序であるとする。その限りでそれは社会的行為の動機づけとなる。また彼は法の近代化を合理化のプロセスとしてとらえた。西欧においてのみ合理化、合法化のプロセスが法の形式合理性を進展させたのはなぜかを考察した。彼は法預言者がカリスマ的に法を啓示する段階から、法名望家が法を創造し、法を発展させる段階へ、さらに世俗的な命令権や神政的な力が法を授与する段階へ、そして法の専門家が体系的に法を定立する段階へと発展することを指摘した。そしてこの最後の段階は法の専門家による裁判による段階へと連結する。ヴェーバーはこのような法の合理化を法の政治的利害や功利的な利害、実質的な正義という観点から取り扱う側面と、法の論理的な整合性を追求する側面に分けた。法の合理化には両者の葛藤が存在するのである。前者は実質的合理性であり、後

者は形式的合理性である。彼は形式的合理性の増大という側面で法の合理化をとらえるが、形式手続きの高度な合理化の背後に自然法という実質的な理念がつねに存在する点を見逃さない。そこで形式的な正義と実質的な正義との葛藤が生まれ、それを如何に解決するかが法の専門家の資質にかかっていると考え、イギリスのように実務家による法の専門家とヨーロッパにおける教育機関による法理論の教育の違いを指摘し、後者のように法を論理的な規範として適用することが法の合理化を促進させると考えた。この法の合理化は合法的支配を生み、官僚制という組織形態を形成し、それを維持するのに貢献した。ここにヴェーバーの法における合理化と政治における支配の合理化の接点、さらにそれらと経済的な合理化と関連性に関する膨大な研究が展開されたのであるが、官僚制に関して言えば公務の遂行は非人格化されるに従って能率的になり、官僚制は他のいかなる行政形態に勝るのは、機械生産が機械を用いない生産方法に勝るのと同様であると考えた。そして近代の裁判官は自動販売機と同じく手数料とともに訴状を投げこめば、法典から機械的に演繹される判決理由をそえて判決が吐きだしてくれることになってくる。そこにはエートスも正義もない機械としての裁判官の姿が見える。

ところでルーマンはヴェーバーの合理性、合法的正当性の理論はそれが問題を定式化したにとどまり、それを解決するメカニズムを提起していないと批判する。彼は法が実定化されると決定を下すものは学習を学習しなければならないだけでなく、決定の対象となる者も学習の学習が必要になると考える。それは決定が受け入れられると予期されることにより正当化される。つまり前二者の学習を統合したものが合法性のもつ正当化と考える。(村上淳一、六本住平訳『法社会学』岩波書店 1986年 286頁)。彼は正当性の概念が規範や価値の内面化によっては十分に把握できず、社会システムのレベルで定義されなければならないと主張した。そして行為の外面的な決定原因と内面的な決定原因の区別は近代の法と道德の区別に反映している。法と道德の区別は良心を規制という機能から解放させる。そしてルーマンは法が今や間主観性的に伝達可能であるという方法論的な要請を満たしえなくなったと言う(『前掲書』245頁)。法の完全な実定化のためには法から切り離された諸機能が法と無関係に、そして法の変化にも関わらず満たされていることが必要になる。彼は法概念を存在

論的でなく機能的なものとして理解しようとしたのである。したがって正義の問題は倫理的な問題として法の外にあることになる（『前掲書』247頁）。

かつては法は正義を含めて道德の分野と密接に関係すると考えられていた。しかし今や法は即物的、機能的に考えられ正義の問題と無関係になったのである。しかしこの傾向は警察官や裁判官が犯罪を犯しても何ら不思議ではないということではないし、それを正当化するものでもない。正義は道德と法を結ぶ要であり、倫理的にも法的にも社会を秩序づけるのに不可欠な文化である。そのような重要な正義を社会学的に解明することは今日的な状況においてますます求められていると思われる。

### 3. なぞなぞ

なぞなぞは「何ぞ」という問いかけの言葉に由来する。その起源は古く上代にまで遡るという。その前提として人間は好奇心をもつ動物であり、謎を見だし、その謎を解こうとする習性をもっていることが挙げられる。人間は謎を解くことに興味をもち、さらに謎をかけること自体に関心をもつ。謎掛けと謎解きが人間関係を形成し、それをより蜜にする。それは遊びになり、遊戯になる。人間は謎をつくり、他者がその謎を解くのを試し、それを見て喜ぶという知的な遊戯に興じる傾向性を持っている。また謎々は幼児に文芸関係の常識や故事などを教える機能も持っていた。

しかし謎はもともと神秘の域の話であった。スフィンクスはデバイの郊外で人に謎をかけ、解けないものを殺したという。スフィンクスとはエジプトの太陽神の象徴である。それはギリシャ語では絞め殺す者の意である。ギリシャ語の原意は「テーベの畔に住まい、頭は処女で、翼とライオンの体をもつ、破滅させる神秘的なもの」である（*Griechisch-Deutsches Schul-und Handwörterbuch*）。その謎は「朝4本足で、昼は二本足、夜は三本足で歩くものは何か」であった。フロイトの言う例のエディプス・コンプレックスのエディプスはこの謎にそれは人間であると答えた。スフィンクスは謎を解かれたのを不面目に思い岩から身を投げて自殺したという。デバイの人々はエディプスのお陰でスフィンクスが亡くなったので喜び、彼を王として女王イオカステスを娶らせた。



彼はその前にデバイへ行く狭い道でライオス王と出会い、道を避けよということで喧嘩になり王を殺してしまったのである。実はライオス王は彼の父親であった。そこから「予言の自己実現」の悲劇が続くのである。人生のはかなさを述べたドイツ語の人生の無常感を述べた諺 Morgen rot, abend tot. (朝は紅顔, 夜は白骨) も見方によれば、謎々として通用するかも知れない。

ドイツ語の謎 (Rätsel) は心で推し量る, 言い当てるという raten に由来し, それは 英語の謎, 判じ物, 難問, 不可解なもの (riddle) に通じている。日本語では『古語辞典』によれば, 謎々は「謎を重ねて名詞化した語」であり, 『広辞苑』には謎を「なぞなぞ。遠回しにそれとなく悟らせるように言いかけること。意義不明で解釈のむずかしいこと。不思議, 不可解なこと。また, その言葉」と言い, 謎々を「ことばの中に他の物事を含ませ, 何ぞ何ぞと問いかけて答えさせる遊戯。なぞ, なぞかけ」と説明している。そして謎歌の例として「鼠の家 (穴) 米つきふるい (粉) 木を伐りて引き切り出す (火) よつ (四) というかそれ」で「あな恋し」を意味するような歌を出している。『徒然草』には62段に「ふたつ文字, 牛の角文字, 直ぐな文字, 歪み文字とぞ君は覚ゆる恋しく思い参らせ給うとなり」が出てくる。これもふたつ文字は「こ」, 牛の角文字は「ひ」あるいは「い」, 直ぐな文字は「し」, 歪み文字は「く」であり, 「こいしく」の意となる。この恋しいは嵯峨天皇の皇女悦子内親王がまだ幼い時, 父君をなつかしむ心である。いわゆる男女の恋のそれとは異なる。内親王は天皇の父をなつかしむ心を歌に読み, それを使者に託したのである。

中世ではこのような謎解きが流行したようである。国語学, 音声学で貴重と言われるものに「ははは二たびあひたれどちちには一どもあわず」がある。答えは唇である。その解は, 近世以降母の発音はハハであるが, 以前はファファと発音していた。したがって母と発音する時, 唇は二度会うが, 父を発音するときは唇は離れたままで合わさることはないからである。

社会学的に見て興味のある謎々がある。ここでは鈴木三編の『中世なぞなぞ集』(岩波文庫 1985年)にある「なそたて」を中心に見ていきたい。そこには「にくさにさりぬさりながらわすれず」がある。答えは「軒の忍ぶ」である。解は「退 (の) き忍ぶ」で, 愛しあっていた男女が何かの拍子に憎くて離別せざるをえない羽目に陥った。離別したが愛は容易に忘れさることができない。

男女どちらかの心の葛藤、愛憎の機微を巧みに謎掛けに託していると見たい。

「恋にはこころもこと葉もなし」の解は糸である。かつては戀の字のように恋いという文字は心と言をとれば糸の字が二つ残るので糸である。今の漢字の略字では恋いであるが、元は糸を二つ書き、その中に言を書き、その下に心を書いた。当用漢字の略字しか知らない世代にはこの答えは理解しにくい。この恋という言葉は「いとしいとし言うところ」などとも言われている。中世の謎々には理解しにくいものが多いが、例えば「ひがしおもて」という謎々の答えは「うずら」である。解は十二支によれば東は卯であり、表は面（顔）であるからということになる。マックス・ヴェーバーが儒教のエートスを外面的な品位の倫理（die äußer-liche Würde）であると述べている。彼はそれをフランス語のマニエール（manieres）とかジェスト（gestes）などの言葉で現そうとしているが、ゲジヒト（Gesicht）というドイツ語も使っている。それは面子であり顔である。顔を立てるとか、顔を潰されると言った意味で使われる顔である。このような倫理的価値は外面の形に現れる。したがってヴェーバーは儒教の倫理は審美的な性質を帯びていると考えたのである。人物画の社会学的考察において顔の表情は内面性をも見て取ることができる大切な窓といえるが、東洋人にとっては「ひがしおもて」はとくにこのような意味をもっていたのである。

「女房」という謎々の答えは「あまがさき」である。もともと女房という言葉は女官に与えられた部屋である。それがそこに住む女官の称となり、さらに、貴族の館に住む女性、そしてさらに一般の女性、婦人、人の妻の意に転じた。答えの「あまがさき」の解は尼が先で、尼になる前の状態を指すからである。ちなみに最近、自分の妻を「よめさん」と呼ぶ男性がいるが、嫁は舅、姑から見ると、息子の嫁を「よめさん」と言うのであって、自分のワイフをよめと呼ぶのはおかしい。家族制度の変化だけの問題でなく、呼称の誤りが一般化したものと思われる。

「うしやただあしもやすめずふるさとかえりてはゆく山路なりけり」は故郷に帰ってきたが、そこに居れずまた旅をしなければならない心情を吐露している。解は「またたび」である。「うしやただあしもやすめず」は鬱的な精神状態をあらわし、心の故郷も失った行人の様子を伝える。この人は帰る故郷を

持っている人である。しかしそこに安住することはできない。彼は故郷喪失者 (Heimatlose) ではないが、それに近い人である。啄木が歌った、「故郷は遠きにありて思うもの」なのかも知れない。また「石をもて追われるごとくふるさとを出でしかなしみ消ゆる時なし」と悲しみと執着が輻湊しているのかも知れない。山頭火の「ふるさとは遠くして木の芽」、「ほうたるこいこいふるさにきた」の心境であろう。

アダムはヘブライ語で大地を意味する。ドイツ語の場所 (Platz) もまた、プラテラすなわち平たい足の裏のことである。大地はわれわれの足が立つ根拠であり、まさに立脚点である。人の立脚点は生まれ故郷であり幼い日を過ごした山河である。その故郷を脚も休めずすぐ旅だたなければならない人もいる。あるいは多くの人々は日々旅にして旅を住みかとしているのであろう。またたびは植物であるが それは強壮に効果があり、それを食するとまた旅にでかけられるから名付けられたともいう。そうであれば初めの「うしや」の意味が消え失せる。

このように謎々は言葉遊びとして面白い。それは言葉への関心、注意力を養い、頭の体操になる。高齢社会のぼけ予防に役立つであろう。また学問、研究は元来謎解きであった。古代ギリシャの哲人達は宇宙、世界のアルケー、つまりすべてのものの原理、究極の原理、根拠を求めて思索した。前期イオニアの哲学者タレスがそれを水とし、「万物は水からなり、水に帰る」と看破したのはアルケーの謎解きの結果であった。謎解きの面白さは謎を追い掛け、それを解くことにあると言える。

言語社会学ではこのような謎々の研究は行なわれているのであろうか。寡聞にして知らない。言葉遊びができるということは、その国や時代の文化を知る上で重要である。また謎々を課し、それを解くことができるというのは教養の程度が高いことを示唆する。

数十年も前のこと、学生から「社会学とは」という題で何かの文を書かされて、社会学は疑問詞の続であり、????? — と書いたことがあった。今でもそのように思っている。またかつて「生と死の社会学」という小論を書いたことがあるが、それは「生死が永遠の謎であり」(Leben und Tod sind das ewige Rätsel.)、その謎解きを社会的に行なってみたかったからである。今

はもっぱら『絵画社会学素描』において、絵画の社会学という名の絵解きを行っている。

(くらはししげふみ 佛教大学社会学部社会学科教授)